

その他の諸侯に召された。この三人の盲人は、それぞれのち医員に登用された者である。このように当時の医療は、たとえ盲人でも鍼の技術を身につけ、病気を治せる実力・能力が備わったとき幕府の医員に登用される可能性を持っていたのである。

次に幕府内での鍼の施術者について見てみよう。幕府内では、三四家が鍼の施術をしていた事が判明した。その内訳を見ると、幕府の鍼科の医員は次の二八家であった。

坂氏本家・坂氏分家・藤木十左衛門某・山本家・佐田氏本家・佐田氏分家・増田家・須磨家・上田家・岡本壽仙祐品・山崎家・栗本家（杉山檢校和一の弟子）・吉田家・島田家・畠山家・前川家・小崎三省敬直・茂木家（以上一八家）

\*盲人（一〇家）：三島檢校安一・杉岡檢校五一・杉島檢校不二・杉枝家・島浦（和田）家・板花檢校喜津一・島崎家・石坂家・芦原檢校英俊一・平塚檢校東栄一

医員以外で鍼の施術をしたのは次の六家であった。

\*盲人：山川檢校城管貞久・杉山檢校和一

\*外科の医員：熊谷（曾谷）伯安宗祐

\*御目見医師（町医で將軍に拜謁できたもの）：村井閑節某・

細見幽悦某

\*藩医：吉田一貞某 \*：（姓名の者は一代限り鍼の施術をした）

これから考えると、盲人は医員二八家の内一〇家を占め、栗本家は杉山檢校の弟子であったなど、幕府における盲人は重要な役割を果たしていた。

本稿のまとめとして時代の流れから鍼を検討しておこう。鍼は

緊急医療でないために、戦乱の時代には寺社や京都の医師によって育まれ、あまり重要視されていなかった。幕府初期において、外科医熊谷伯安宗祐は徳川家康の腫瘍に対し薬と鍼を使用した。

幕府に鍼専門の医員が登場したのは、大阪冬・夏の陣を終えて幕府の礎も定まった三代將軍家光の時代、寛永五年（一六二八）六月の坂寿三幽玄であった。平和の訪れが広く鍼の需要を増やし、市井の医師や盲人が鍼医として存在できるようになっていた。江戸時代前半の盲人の山川・杉山も鍼治療にあたったが、医員としては登用されなかった。盲人が幕府の医師に登用されるようになったのは、杉山の弟子三島・杉岡からであった。その後、杉山の弟子が続々医員に登用されていった。この事は、盲人の鍼技術の熟成期が杉山の頃で、しかも鍼教育が大きな拡がりを持ち、盲人が福祉政策からではなく鍼術の能力を評価されることであったといえる。

（平成元年四月例会）

## フランス革命と医学

大村 敏郎

カトルズ・ジュイエ（七月十四日）という日には祭りと流血と改革の三つのイメージが重なっている。今年二〇〇〇年目を迎えたフランス革命記念日の次の日にこの例会がもたれた。

大臣ジャック・ネッケル (Jacques Necker, 1732~1804) が罷免されたことに端を発して革命の火の手が上がった。ネッケル病院

という、聴診器が発明され、現代では腎移植で有名になっているあの病院と関わりのある人物である。

民衆と王室政府の間の戦いの流血もあれば、恐怖政治につながるギロチンの処刑による流血もあった。

この断頭台ギロチンはさまざまな様式の死刑を均一化する提案をした解剖学者ジョゼフ・イグナス・ギヨタン (Joseph Ignace Guillotin, 1738~1814) の名に因んでつけられたのだが、当人は生涯それをいやがっていたという。

これが実用化されたのは一七九二年春からで、六〇キロある鋼の刃を三角型にすることによって切れ味をよくし、処刑者の苦痛を小さくしようという外科医アントヌ・ルイ (Antoine Louis, 1723~1792) の改良が加わって完成した。一時はルイゼットとかルイゾンと呼ばれたこともある。ルイは王立外科アカデミーの事務局長であって、現在パリ大学の旧医学部と呼ばれている講堂を完成させたり、内科と外科の結びつきを深めようとしていたり建設的な業績の多い人物である。

医学に及ぼす革命の影響は何といっても、内科医と外科医が同じ教育機関から育つように改革されたことである。医学部も外科学校も廃止され、医療担当者が一人も育たぬ期間があったが、一七九五年に健康学校 (Ecole de Santé) という名で、元の外科学校の校舎を使って再開された。この空白期間に大活躍したのが外科医ジョゼフ・デソー (Joseph Desault, 1738~1795) であつた。

この内科と外科の交点から十九世紀前半の華々しい臨床医学が

パリの病院を中心に花開くのである。ビネル、コルヴィザール、ビジャー、ラレー、ラエネック等がそれを担った人々である。

ちょうど革命の頃日本では吉雄耕牛・杉田玄白・華岡青洲らが活躍していた。『解体新書』(一七七四)と青洲の全麻乳癌手術(一八〇四)の間は三〇年あるが、その真中にフランス革命が起きているのである。彼等はフランス由来だということを知らずに蘭方の外科と信じてアンブロアズ・パン (Ambroise Paré, 1510~1580) の全集から書き写した外科絵図を大切にしていたのであつた。また青洲の内外合一という思想もアントヌ・ルイに通ずるものがある。

革命は二〇〇年前の遠い出来事だが、ルイ十六世やマリー・アントワネットの悲劇だけではなく、現代の実用医学の原点がキラ星のように並んでいるフランスのこの時代に思いをはせればパリ祭もたんなるお祭りだけにしておけないと感ずるのである。(平成元年七月例会)



紹

介

木村陽二郎著『江戸期のナチュラリスト』

ナチュラリストという呼び名がすっかり定着してきている。ナチュラリストといい換えただけで江戸時代の本草・博物家もずい分モダンに見えてくるから不思議である。この呼称を率先して提